

普及技術

平成 22 年度

かき「平核無」低樹高栽培の適正枝配置		
[要約] <u>かき「平核無」の低樹高栽培樹</u> は、せん定後の <u>1年枝</u> を11000本/10a程度配置し、以後は慣行通りに管理することにより、 <u>出荷量2000kg/10a以上</u> 、 <u>L規格以上果実比率60%以上</u> を実現するとともに、樹の徒長的な生育を抑える。		
農業総合研究所園芸研究センター 育種栽培科 農業総合研究所佐渡農業技術センター	連絡先	TEL 0254-27-5555 FAX 0254-27-2659 TEL 0259-63-4102 FAX 0259-63-3972

[背景・ねらい]

県内かき主力品種「平核無」は、大玉高収量生産が求められているが、産地では作業軽労化のため大部分が低樹高栽培となり、収量減と収穫果の小玉化が問題となっている。そこで、良好な果実肥大と収量維持を両立できる枝配置を示す。

[成果の内容・特徴]

- 1 産地では、出荷量の多少にかかわらず、1年枝密度が低くなるにつれて果実肥大が良好となり、L規格以上果実比率60%以上をめざす際の1年枝密度は、おおむね10～11本/m²（樹冠面積あたり）以下である（図1、2）。
- 2 低樹高樹のせん定時に、1年枝を10a当り11000本程度配置し、以後は慣行通りに管理することにより、商品果収量平均2600kg/10a、最低でも2000kg/10a以上、L規格以上果実比率60%以上が期待できる（図1、3）。
- 3 10a当り1年枝数11000本に調整した樹は、8500本や6000本の樹と比べ、徒長枝や2次伸長枝の発生が少なく、新梢伸長も短めで、樹の徒長的な生育が抑えられる（図4）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 せん定時に残す1年枝は、長さ5～20cmの枝が中心になる。
- 2 せん定後の新梢や着果等の慣行管理は栽培指針に準じ、摘らいは1新梢1らい、仕上げ摘果は、結果母枝当りの葉果比15～20を目標に行う。

[具体的データ]

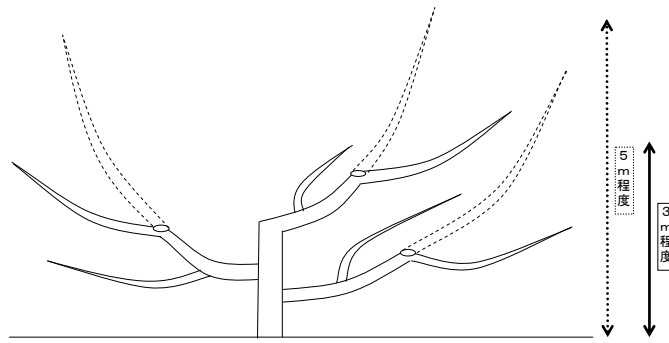


図1 「平核無」低樹高栽培の模式図

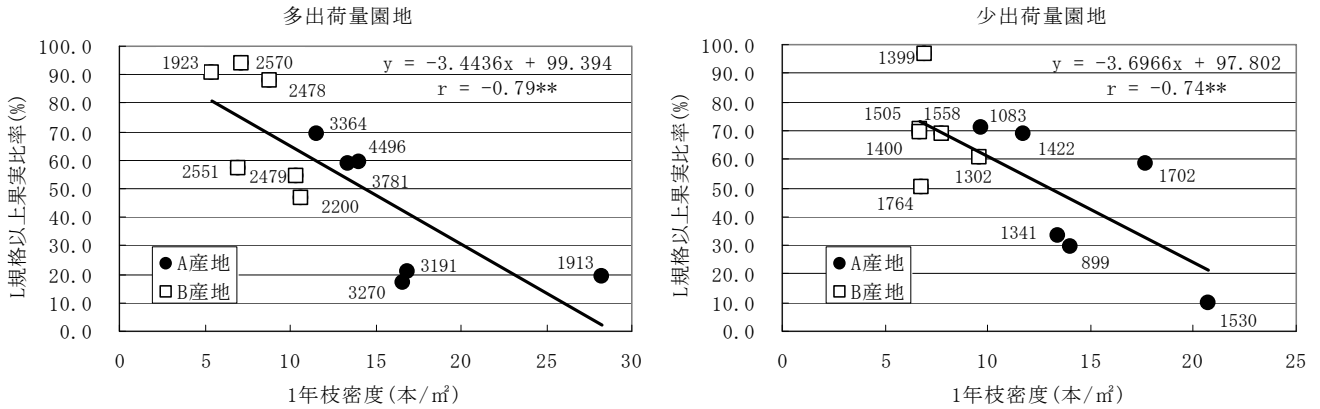


図2 産地における1年枝密度と果実肥大との関係
(H20年、H21年平均、マーカー横の数値は出荷量：kg/10a)

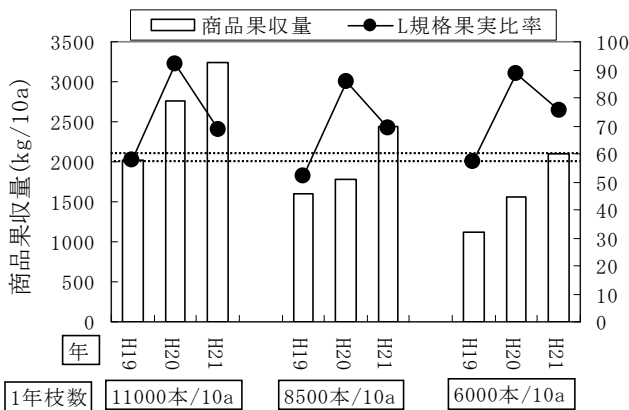


図3 せん定後に残す1年枝数が収量と果実肥大に及ぼす影響

(園芸研究センター内ほ場試験、樹齢28~30年生
栽植密度12本/10a)

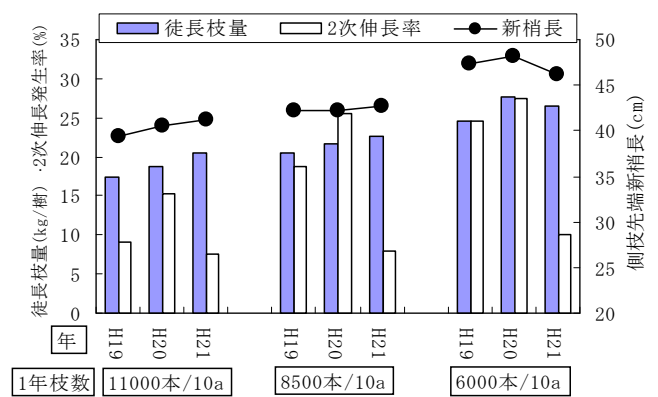


図4 せん定後に残す1年枝数が樹体生育に及ぼす影響 (園芸研究センター内ほ場試験)

[その他]

研究課題名：カキの低樹高栽培における大玉高収量生産に向けた収量構成基準及びほ場格付け技術の確立

予算区分：県単特別

研究期間：平成19年~21年度

発表論文等：なし